



撮影＝岩橋仁子

(株)草むしり 創業者

宮本成人さん

みやもと しげと

昭和40年(1965年)長野市の桃専業農家に長男として生まれる。体育会系の学生時代は日本拳法で大学チャンピオンに。大学卒業後、地元企業に就職したものの2年で退職。その後、大手ファストフードのフランチャイズ経営で売上げ全国ナンバーワンを獲得するが、長続きせずに転職を続けること8回。実家でひきこもり生活を送る中、43歳の時に出会った“草むしり”の仕事に目覚める。翌年、(株)草むしりを創業し、代表取締役社長に。現在は社員5人と共に働く喜びに汗をぬぐう。群馬県高崎市で妻と子供2人と暮らす。

働く喜び
汗かく喜びを
感じたくて

就職難といわれる現代。にもかかわらず三割の若者が三年以内に退職していく、そんな時代だ。宮本成人さんは転職を繰り返すこと八回。人生に迷い、働く意味を探り求めていた。しかし宮本さんは天職に出会った。草むしりとの出会いが、彼に生きる希望を与えた――。



群馬県前橋市で「草むしり」や「庭木の剪定」「伐採」などを請け負う(株)草むしり。
創業から4年、5名のスタッフと共に高齢者夫婦や独居世帯を中心に市内530軒の庭整備に精を出す

私の仕事は 「草むしり」です

——草むしりを仕事にしているって伺いました。

宮本 やっぱり驚かれました？ そうですね(笑)。僕の仕事はご家庭のお庭に入れてもらって草むしりをする事です。植木の剪定や枯れ木の伐採をさせてもらうこともあります。

全国的にもそうだと思いますが、ここ高崎市や隣の前橋市でも高齢化は著しく、体力的にお庭の手入れができないお宅が増えていきます。私は現在、前橋市の一地区、半径にして五キロメートルを受け持っていますが、この仕事を始めて以来四年間で五百三十軒のお客様とご縁をいただきました。そのうち九割は、高齢者の夫婦または独居の世帯です。

——高齢者が主ですか。
宮本 ええ。ですから時

にはお客様の話を聞くことが仕事みたいな現場もありますよ。朝、訪問してまず三十分のお茶休憩。一時間仕事をしたらおやつ休憩、お昼をお誘いいただくこともあります。

その分、集中して作業が進むわけですが、ひと息つきながら思うんです。『ああありがたいなあ』って。僕たちは福祉の資格を持っていないわけじゃない。カウンセリング能力だってない。でもこうしてお客様に、社会に必要とされていることが、存在価値を認められているようで、とてもありがたいと思うんです。

当社はスタッフ五人のうち、四人が六十五歳以上ですが、みんな心身ともに元気ですね。おかげさまで充実感を持って励んでくれています。今日も来てくれている竹内さんは六十九歳。月に二十五日くらい出てこ

まったんです。

——軽い気持ちで。

宮本 ええ。そんな調子で転職を繰り返して、四回目の転職先は二十六歳の時、大手ファストフード店でした。負けず嫌いで根性だけはあるので、すぐにお店を任せてもらえるようになり、数年後にはいくつかの部門で売上げ日本一を記録することができました。『増収』『日本一』が私にとって仕事の動機でした。そして四十歳に差しか

ンしている方が多いので、高齢者の第二の活躍の場として、いつそう展開させたいと思っています。

働く意味が わからない

——以前から高齢者を対象にした仕事をめざしていたのですか？

宮本 いえ、実はそんなことはないんです。高齢社会の需要にマッチしたのは結果であって、ここにたどり着くまでは本当に長い道のりでした。

というのも、私はいま四十八歳ですが、これまでに転職を八回しています。大学を出たものの働く意味が見出せず、無職で実家にひきこもり、うつ状態になったこともあります。

さかのばれば、私の大学生活は「日本拳法」一色でした。怖い先輩の下でどん



中学生の職業体験の日はいいにくの雨。しかし宮本さんは生徒に言った。「雨だから仕事できませんなんて言えない。お金をいただく以上、プロとして誠心誠意やりましょう」。この日、生徒たちは人生で初めて仕事のシビアさとやりがいを感じた(平成24年5月)

れますし、今日は雨だから現場作業なしと言っても、ほかに仕事はないかと出社されます。先輩方を見ていると、日本人って本当に仕事が好きなんだと感心しますよ(笑)。

——仕事が元気の源だと。
宮本 そうですね。人は人の役に立つことで、より元気になれる存在なのかもしれないですね。

おかげさまでこの仕事はリピート率が九割近いので、年間の受注件数の見込みが立ちやすいんです。経営次第で「雇用」も可能ですから、竹内さんのように社会貢献に汗をかきたいという高齢者の、受け皿になればと思っています。

近ごろは定年を六十五歳に定めたり、定年後も再雇用して高齢者の力を活用する企業が増えてきました。それでも平均寿命が約八十歳の現代です。体もピンピ

この人に聞く

岡本さん（中／67歳）、竹内さん（右／69歳）と。定年退職しても心身ともに元気な高齢者を雇用する。若者の研修生はこれまでに2名が各地で独立を果たしている



ったころ、私は飲食業として独立開業すべく店長職を返上しました。収入は申し分なかったのですが、雇われ店長としてストレスが多く、たまった鬱憤を晴らすために収入のほとんどを飲み代に費やすような廃れた生活だったからです。

思えばこのころから私の仕事観は歪んでいました。名誉やお金を得ても幸せは

イトのままではいられせんから、私は独立して「草むしり」を仕事にすることになります。すでに四十四歳。遅咲きではありますが、ようやく天職に就くことができました。

つかめない。努力しなきゃ没落するし、努力したって苦しむんだもの。仕事をする意味がなんなのか、もう全然分かんなくなっちゃったんです。

——独立開業は、その後。
宮本 結局失敗しました。勢いよく辞めたけど、もう仕事にかけるエネルギーが出てこなかったんです。私は長野の実家に帰りま

手当たり次第にチラシを配り、暗中模索しながら少しずつ受注していききました。仕事を請ければ一軒一軒にお礼の手紙を出しました。そしてアンケートも同封したのですが、忘れもしません。最初に返ってきたアンケートに「もう二度とお願ひしません」と書かれていたんです。

——二度と、ですか。
宮本 衝撃でしたね（笑）。落ち込みましたよ。でも不思議なんです。とっさにお詫びに行こうって思えたんですよ。それまでの僕だったら「もういいや」と諦めたと思うんですが、胸に覚えた仕事の喜びが僕を突き動かしたんです。

菓子折りを抱いて訪問しました。どうやら植木の仕上げに不満だったご様子。菓子折りすら受け取っていただけませんでした。が、僕の心に残ったのは、絶対

した。いくつのアルバイトを渡り歩いたか。結局一つも定着しませんでした。

転職というのは怖いものです。それはいつしか癖になり、少しでも苦しいと、もういいや」となってしまふんです。転職するたびに、僕は打たれ弱くなっていって気がします。

その後、縁あって群馬県高崎市の飲食店に拾ってもらうことになりました。結果的にその飲食店も辞めなければいけなくなるのですが、そんな時、知人が造園業の「草むしり」のバイトを紹介してくれました。忘れもしません。四十三歳の十一月です。

出勤初日。もうここでくじけるわけにはいかない。僕は玄関先で妻と子にそう意気込んで出勤しました。トラックに乗せられて現場に行くと、そこは高崎市内でも有数の名家でした。広

い上がってみせる」という気配みたいな感情でした。どんなにつらくても、そこに喜びややりがいがあればなんだって耐えられる。それが仕事の醍醐味ではないでしょうか。

四年目の昨年は、地元の中学校から「職業体験」の打診がありました。僕は手を抜かないと決めていました。せっかくだから、機会はですから、子供たちに仕事の本質を体験してほしかったんです。当日は雨でしたが、生徒もよくがんばってくれました。ある生徒は「働くのは大変。でも気持ちいい」と言ってくれ、思わず「おじさんも仕事ってそういうものだと思うんだ」と、うなりましたよ（笑）。

——喜びを共有されて。
宮本 ええ。最近はいろんなつながりの中で、就職後すぐに離職した若者や失業された方が当社に研修に

いお庭をスタッフが手分けして剪定や抜根をしています。私も草むしりをさせてもらいました。

木枯らし吹き荒ぶ季節でした。でもね、僕の心と体はポカポカです。お庭は見違えるほどきれいだし、家主さんも喜んでくれます。お茶でもどうぞと労われ、帰り際には報酬もいただく。初めてかもしれない。これが仕事だと思ってええなんです。肩書や給与額ではなく、お客様に自分の価値を認めてもらい、感謝され、そして報酬を得て妻子を養う。これこそ僕が求めていた仕事だっと思ってたんです。

喜びが生む「粘り強さ」

——いよいよ打ち込める仕事に出会ったのですね。
宮本 はい。結果的には家族の生活もあってアルバ

来られます。そこで僕が大切に行っていること、それは「粘り強さ」です。

群馬の夏はすごく暑いんです。体感温度は四十度を超え、夏を越えるのはひと苦勞ですが、社会で生きるってそんなものだと思うんです。その過酷さを受け入れ、克服する粘り強さを得てほしくて、僕も声をかけながら共に汗をぬぐいます。するとどうですか。ひと夏を越えた若者の目には自信がみなぎるんです。

かつて社会の落ちこぼれだった僕にも夢があります。それは独自に生計を立てられる「草むしりマイスター」を日本全国に千人育てることです。当社を、働く意味を見出せない若者や定年後にまだまだ社会貢献に汗したい高齢者の研鑽の場として、人生の喜びを共にはぐくんでいきたいと強く思っています。（本誌）